

# 歴史資料館ニュース

## 内 容

1999年夏季（創刊）号 6月1日発行  
発行責任者 田中正智  
電気通信大学歴史資料館  
電話：0424-43-5296

◇歴史資料館がオープンしました	p. 1
◇歴史資料館へようこそ	p. 1
◇新入生の感想	p. 2
◇“モールズ通信お別れ会”を取材して…	p. 3
◇熱烈歓迎哈尔滨工程大学視察団	p. 3
◇体験空間としての博物館	p. 4
◇これからの展示予定	p. 4

## ◇歴史資料館がオープンしました



### テープカット (1998年11月2日：庶務課提供)

左から弓場IS研究科長、安永学部長、有山学長、宮坂名誉教授、湯川学生部長、矢部図書館長。

テープカットに先立ち有山学長が参列者を前に、次のように挨拶した。

この資料館は、無線電信講習所に始まった電気通信大学の歴史的な資料を保存し、本学の歴史と現状そして将来の構想をビジュアルに展示することを目的とする。

歴史資料館での展示を通じて、先人の情熱と努力それに多大な労苦に敬意を表しながら、急速に進展する技術革新と多様に変貌する情報化社会の中において、常に本学の存在意義を明らかにしたい。

この資料館を、本学の学生と教職員それに内外の研究者はもとより、とくに若い世代を中心とした地域社会の人びとに向けて開かれた施設とする。

関係各位の一層の努力と、学内外からの暖かいご支援を期待したい。

電気通信大学歴史資料館が、学内措置により開館しました。多くの人びとのご支援と関係者の努力が実を結び永年の夢の一部が実現したのです。

### これまでの経緯

これまで資料館（仮称）の運営は、学術調査委員会（委員長有山正孝学長、宮坂武芳（名誉教授）、道家達将（元教授）、石島 巖（同）、田中正智（情報通信工学科）、桑嶋陽一（講師））が当たり、旧電子情報学科と新情報通信工学科の配慮で、有澤豊志（技術専門職員）と足立 登（同）が担当してきました。

また大学創立80周年記念行事の開催を機会に発足した展示専門委員会（委員長矢部初男図書館長）と合同で運営方法を協議してきました。

これまでの準備の経緯は、あらまし次の通りです。

- 1996年 学術調査委員会発足。旧I棟に保管中の資料を旧機械工学科の実習工場に搬入、展示準備開始。
- 1997年 調布祭期間中に仮開館、図書館ホールで所蔵するNMR用マグネットならびに古文書を展示。
- 1998年 解説用ビデオの制作開始。情報工学科を中心にコンピュータの歴史展示室（教育用計算機棟）の整備を開始。大学創立80周年記念月間（11月2日（開館セレモニー）から12月8日（創立記念日）まで）の期間中に多彩な記念行事と平行して臨時開館。
- 1999年 4月から新入生を対象としたパネル展示“電気通信大学100年”などで、ほぼ定期的に開館。98年11月から99年5月までの来館者約1200人。6月、学術調査委員会と上記展示専門委員会を母体として資料館運営委員会が新たに発足。

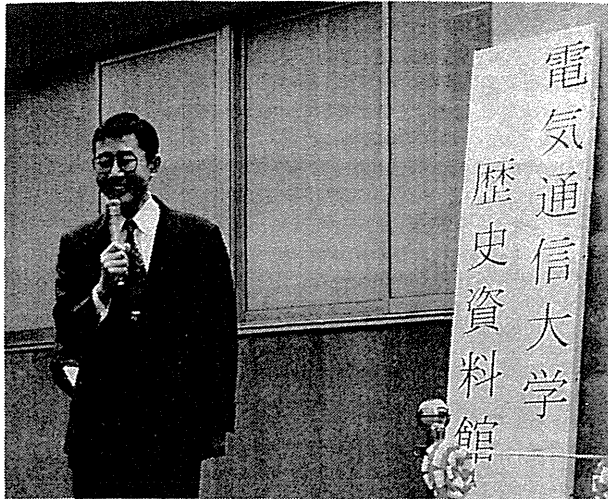
## ◇歴史資料館へようこそ

人類がこの地球上に誕生してから昨日まで、さまざまな“こと”が起こり、人びとはさまざまな“こと”をしてきました。それらの“こと”のあるものは、時代を超えてあるいは海や砂漠を渡って遠方へも伝えられ、影響

し合ったのです。

それらの内、語り伝えられ、記録されている“こと”と、遺されてる“もの”が歴史的な資料です。

その膨大な資料を“政治”“経済”“文化”“学術”あるいは“戦争”など、特定の視点を通じ時の流れに沿って選択し特徴を認識した結果が、〇〇の歴史です。



#### 来賓祝辞 (1998年11月 2日：庶務課提供)

電気学会電気技術史研究会を代表して高橋雄造教授(東京農工大学)から次のような祝辞を頂いた。

有山学長はじめ、この歴史資料館の開館に努力された電通大の皆様は心から敬意を表する。

すでに亡くなられ、あるいは戦争の犠牲となられた方がたを含め、目黒時代からの教職員と卒業生の皆さん、それに在学生とその親御さんも、さぞかしお喜びのことと拝察する。

国内はもとより世界的にみても、無線通信の技術とその運用を中心とした博物館は極めて稀である。携帯電話やパーソナル衛星通信の時代を迎えて、マルコーニに始まった無線通信の博物館の重要性は、ますます高まる。

今日誕生したこの資料館が、学長が示された方向に、すくすくと育つことを祈念する。

#### それは自分自身に出会う場

したがって〇〇の歴史は、特定の視点／目的から資料を選択し認識する人の個性によって、それぞれに発見されるものです。すなわち歴史の発見は、自分自身との出会いでもあるのです。

この歴史資料館は、広義の情報通信(前身校を含め電気通信大学が実践してきた教育・研究に関連する分野)の技術と運用ないしは経営、言い換えるならばハードとソフトならびにそれらと人びととの関わり、に関する歴史的な資料を所蔵しあるいは収集を続けています。そして訪れる人が自分自身に出会う場を提供します。

#### 若い世代への期待

特に若い優れた個性には次のことを期待します。

- ① 広義の情報通信の歴史を発見する過程で、先人の技術への情熱あるいは執念を感じ取り、科学技術の重要性への理解を深めて、電通大はじめ理工系大学／学部を志望する動機とする。
- ② 電通大の歴史を発見する過程が、この大学の社会的な存在意義を認識し、自身の学習／研究の方向性を見いだす端緒となる。

- ③ 個々の資料についての調査・研究はもとより“〇〇の歴史”すなわち自分の専門分野の歴史を発見する過程で、新しい発想の啓示を得る。

#### より広い世界に生きる契機に

所蔵する資料である“こと”の記録、すなわち文献や書籍も、また“もの”である装置、部品、素子などにしても、その多くは無線電信講習所以来の遺産なので、種類や出版／製作年代が偏っています。

それでも、この資料館を利用した上で、通信総合博物館、国立科学博物館、NHK 放送博物館、航空・宇宙博物館(ワシントン)、科学博物館(ロンドン)、ドイツ博物館(ミュンヘン)などをはじめとする内外の博物館／資料館を訪れることによって、自分自身の〇〇の歴史に関する視野を広げ、あるいは認識を深めて、より広い世界に生きる契機としたいものです。

#### 情報の新たな発信源あるいは拠点として

そして21世紀には、伝統に根ざした特徴ある電通大の個性の一面を、学外に向けて積極的にかつ鮮明に表出したいものです。同時に学内の「知」の再構築(注)の一端を支援できるでしょう。

注 “・・・その知的活動によって社会をリードしていくという重要な役割を担う大学等の高等教育機関が、知識の量だけではなくより幅広い視点から「知」というものを総合的に捉え直していくとともに、それを踏まえて知的活動の一層の強化のための高等教育の構造改革を進めることが強く求められる・・・” 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について」。

#### ◇新入生の感想

上記の祝辞を頂いた高橋教授が本学でご担当の「科学史」の課題として、約300人の学生に課されたレポート“歴史資料館を見て”の中から同教授のお許しを得て無作為に感想を抽出しました。

- 大学内に歴史資料館があることに驚いた。同時にこの大学は長い歴史と高い誇りをもった大学なのだろうと思った。(略) 堅苦しいところをイメージしていたのだが、内部の明るさと、優しいような係りの人にとりあえずほっとした。(略) 私の目に飛び込んできたのは、たくさんの大きな機械だった。(略) 機械類には全くの初心者なので、また少し不安になった。(略)

左側をみると通信の歴史のパネルがたくさん並べられていた。その中に映画「タイタニック」の写真があって、タイタニック号が初めてSOS 信号を使った船であることや、その遭難をきっかけに無線電信が重要視され始めたことなどが書いてあって、親しみやすい話題のおかげで不安は興味へと変わった。・・・(H科 M. K.)

- 私は、この歴史資料館に来る前は全くと言っていい程、情報通信や電気通信を知らなかった。しかしここへ来ることにより、すべてではないが情報通信の歴史を少しでも身につけることができてよかったと思う。歴史資料館を見て感じたことは、ここ数百年の間に情報通信の技術は急激に変化していて、電気通信大学もそれに合わせて、学科をいろいろと変化させてここまで来たということでした。

私もこの電通大生の一員として、情報通信と電気通信大学に何かしらの役に立てばうれしいことだと思います。・・・(E科 A. T.)

- 歴史資料館には、たくさんの歴史的に重要なものが保管されていた。なかには、かなりの年月がたっているものもあるが、保管状態はいいといえると思う。これは歴史資料館を担当している人が普段から気を付けているおかげなのだろう。これから、きちんと手入れをしていい状態で保管し続けてほしいものです。  
(C科 Y. M.)

- ……もう一つ驚いたものが核磁気共鳴 (NMR) のマグネットである。初め見た時は余り専門的なことをあまり知らないため、名前の意味さえ分からず、ただの“もの”としてしか見なかったのである。しかしこの装置の発明者がこの学校“電気通信大学”の卒業生 (注: 教官) の作品であるということです。(略)  
将来は研究職につきたいと思っているので (略) このような事があると自分の将来に自信がもて、これからの学生生活の勉強がとても有意義になるものと考えられるのである。(F科 S. Y.)

- ……次は何か、それは間違いなく我々の住んでいる三次元の世界の映像、立体ハイビジョンである。(略) そして、無線通信に究極の夢と呼ばれる「世界を結ぶ腕時計型テレビ電話」実現。それが今現実のものとなりつつある。……(M科 Y. H.)

- 私は、歴史資料館の扉を開けた。しかし「1791年のシャップ兄弟による腕木通信装置考案に始まり、1999年、タイタニック号以来の無線電信による“SOS”に代わって、新たな“海上遭難安全システム: GMDSS”が世界の海で稼働する (歴史資料館ガイド)」ことに終る (現在も続いているのだが) 情報通信の歴史がある。私達は電気通信大学の学生である。情報通信に深く関わることができる恵まれた環境にある。このことを心にとめておこう。(F科 S. K.)

歴史資料館では、有沢、足立それに院生の村野の3人が、この“お別れ会”の全過程を取材して、ビデオ・テープを制作した。



歴史資料館見学 (取材したビデオから)

注 Global Maritime Distress and Safety System: GMDSS (海上における遭難と安全に関する全世界的な制度) は、デジタル・セルコール (自動選択呼出装) 置)、非常用位置指示無線標識: EPIRB (船舶が沈没すると浮上して作動するブイ)、および/あるいは海事衛星通信システム: INMARSATにより、自動的に遭難警報を送出する。(資料館の展示参照)

## ◇ “モールス通信お別れ会” を取材して 足立 登

1906年にベルリンで開催された第1回国際無線電信会議で、船舶の遭難呼出符号“SOS”がそれまでの“CQD”に代えて制定された。そして、1912年のタイタニック号の遭難の際に、初めてその“SOS”が発信された。それからやがて1世紀になる。

今年の2月1日からは、船舶の遭難通信がGMDSS (注)に移行し、モールス符号を用いる無線電信が使用されなくなった。

これを機会に“モールス通信お別れ会”が3月26日に本学を会場として開催された。(文中敬称略)

主 催: 日本船主協会電波研究会、船舶通信士OB・現役有志。

講演会: A-201教室で、井東洋一 (元日本郵船) と百瀬靖彦 (元商船三井) の司会で開催された。安藤徳 (元日本郵船)、宇野信安 (元商船三井)、および高岡重治 (元日本郵船・元三崎漁業無線) の3人が記念講演を行い、それぞれモールス通信の全盛期を回顧しながら、世界の海で新たに発足したGMDSS (注) への期待を述べた。

見学会: 歴史資料館。参加者約150人が来館し、七つの海で活躍した往年の無線機を懐かしんだ。

懇親会: 大学会館ハルモニアで清水正利 (商船三井) の司会で開かれた。大久保明 (郵政省)、有山正孝 (電通大)、前田隆正 (目黒会)、飯塚幸弘 (元商船三井)、中野正行 (日本無線・水洋会) らがそれぞれ挨拶、参加者は海と船と無線の話題に時の過ぎるのを忘れた。

## ◇ 熱烈歓迎哈尔滨工程大学視察団

桑嶋陽一

中国有数の工科大学の一つで、本学と学術交流協定を結んでいる哈尔滨 (ハルビン) 工程大学から、張副学長はじめ次の5人の視察団が5月11日来館した。

張 曙 副学長、教授 (通信工程)  
黄斌強 学生処長、高級工程 (教育管理)  
劉 勝 教務処長、教授 (工業自動化)  
叢 望 人事処長、教授 (工業自動化)  
孫雪松 外事処 (通訳)

一行は電弧放電式の送信機 (復元修理中) や国産初期の真空管式送信機などを熱心に観察した。旧満州の鉄道網を示した展示パネル「満蒙鉄道概見図 (1931年)」の前では、地元ハルビンの話がはずんだ。

視察の後、張副学長に資料館側から次の詩を贈った。

中日友好超三千年 歴史相似長江流流  
雖悔過去濁流日日 大学交流亜州繁荣

張副学長がただちに次のように応えた。

日中原本好朋友 歲月千年恰似流  
二千即將到来時 更望学子交流稠

(注: 濁流→戦争/侵略行為の意、亜州→アジア、二千→21世紀、学子→教官/学生)

視察団は12日まで、歴史資料館のほか、IS研究科岡本研究室、レーザー極限技術研究センター、図書館、知能機械工学科、共同研究センター、SVBL、留学生センターなどを視察した。

なお、同大学にも同様の資料館があるとのことで、再見と今後の交流を約束した。



## ◇体験空間としての博物館

福田 豊

博物館 (museum) というイメージからは、およそかけ離れたアメリカの博物館を訪れる機会があった。一つはカリフォルニア州サンノゼにあるザテック (TheTech)、もう一つはサンフランシスコのエクスプロアトリウム (Exploratorium) である。

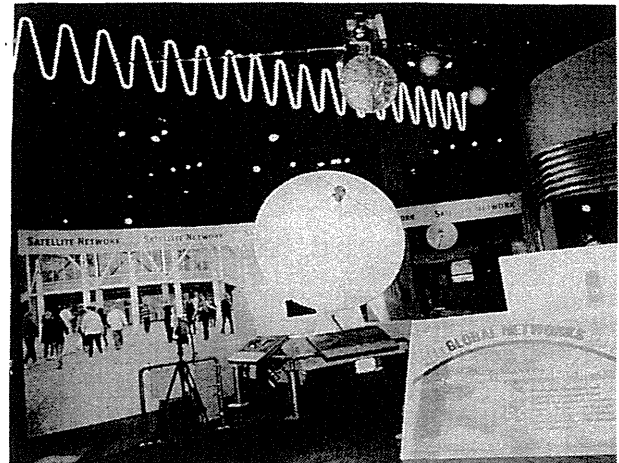
博物館というと、ガラスケースの中に収まっている貴重な年代物の品物を、ほの暗い館内のひんやりした静かな空気を密かに呼吸しながら、悠久の時の流れを感じとるところ、ではないだろうか。

ところが、これらの博物館は全く異なる。多くの展示物はむき出しで、私たちはそれらを自由にさわったり、動かしたりできるのである。躍動的な空気が、熱く私たちを刺激する。それは、博物館というよりも、体験空間という方がふさわしい。

ザテックは、最新テクノロジーの体験空間である。さわることができないのは、半導体製造装置のステッパーぐらいのもので、ほとんどすべて実感できるか体験できるような仕掛けを作っている。体験3Dグラフィックの

コーナーや月面での作業模擬体験などは、人気で順番待ちの列ができていた。また、プラネタリウムのようなドーム型のハイテク映像シアターも、開館と同時にすぐに第1回目の切符は売り切れになっていた。

テクノロジーの凄さと日常体験を超えた不思議さを体験できる空間であった。



衛星通信システムを説明するザテックの展示。専門的な知識がなくとも、システムの具体的なイメージが把握できるように工夫されている。(写真：筆者)

## ◇これからの展示予定

前期の試験前は、さし当たり次の通り、週3回(月、水、金曜日)に、それぞれに示すスケジュールで一般展示、解説およびビデオの3種類の展示を行います。

なお、解説/ビデオの時間帯には、一般展示を併せて行いますので、自由に見学できます。

また、パネル展示“電気通信大学100年”を続けます。

一般展示：自由にご覧下さい。係員が質問を受けます。

解説：示されたテーマに沿って、展示資料の詳細な説明を、視聴覚メディアを併用するなどして行います。先着12名に限りま。

ビデオ：示されたタイトルのビデオを放映します。時間が延長される場合があります。先着12名に限りま。

月日\時刻	12:00-13:00	16:15	17:45
6月 2日(水)	一般展示	解説：情報通信の発祥 [視覚通信/電信と電話/電波とは?]	
4日(金)	一般展示	解説：無線通信の歴史 1 [無線電信/無線通信機/真空管/ラジオ放送]	
7日(月)	一般展示	閉館	
9日(水)	一般展示	解説：無線通信の歴史 1 [無線電信/無線通信機/真空管/ラジオ放送]	
11日(金)	一般展示	解説：情報通信の発祥 [視覚通信/電信と電話/電波とは?]	
14日(月)	一般展示	閉館	
16日(水)	一般展示	解説：無線通信の歴史 2 [昭和の初め豪華客船全盛期の船舶通信]	
18日(金)	一般展示	ビデオ：SOS タイタニック [劇映画 1958 年作]	
21日(月)	一般展示	閉館	
23日(水)	一般展示	ビデオ：SOS タイタニック [劇映画 1958 年作]	
25日(金)	一般展示	解説：無線通信の歴史 2 [昭和の初め豪華客船全盛期の船舶通信]	
28日(月)	一般展示	閉館	
30日(水)	一般展示	解説：GMDSS の問題点 [岩手テレビ制作のビデオを中心に解説]	
7月 2日(金)	一般展示	ビデオ：人工衛星 [宇宙科学研究所作 人工衛星入門 1,2年生向]	
5日(月)	一般展示	閉館	
7日(水)	一般展示	ビデオ：人工衛星 [宇宙科学研究所作 人工衛星入門 1,2年生向]	
9日(金)	一般展示	解説：GMDSS の問題点 [岩手テレビ制作のビデオを中心に解説]	

○土曜日午後と、7月12日(月)から9月30日(木)までの期間は、ご希望に応じて可能な限り臨時開館します。直接あるいは電話(0424-43-5296)などで、資料館までご連絡ください。ただし、夏でも冷房はありません。